

様 式 F - 7 - 1

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実施状況報告書（研究実施状況報告書）（平成 27 年度）

1. 機関番号

4	2	6	7	6
---	---	---	---	---

 2. 研究機関名 大妻女子大学短期大学部
3. 研究種目名 挑戦的萌芽研究 4. 補助事業期間 平成 26 年度～平成 28 年度

5. 課題番号

2	6	5	8	0	0	4	7
---	---	---	---	---	---	---	---

6. 研究課題名 欧米並びにアジアとの比較を介した日本近代文学及び映画における死の表象の再構築

7. 研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
0 0 3 4 1 9 2 5	キドノ トモユキ 城殿 智行	国文科	教授

8. 研究分担者

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名

9. 研究実績の概要

研究計画に基づき、死生学に関連する表象理論の構築に努めるとともに、日本および国外における映像・言語資料の収集と分析を行った。また、両者を結びつける形で、関連する内容の一部分を、「輝く太陽の下で 谷崎潤一郎の「関西」と増村保造の「ローマ」」と題して近刊を予定する。谷崎は日本近代における映像と言語表象の関連を考える際に避けて通ることができない存在であり、本研究代表者もこれまで継続的に谷崎を論じてきた（「云ふ迄もない話 谷崎潤一郎『吉野葛』論」『文学』8(4)、157-166頁、1997・10、「他の声 別の汀 谷崎潤一郎『蘆刈』論」『日本文学』48(6)、39-49頁、1999・6、「映画と遠ざかること 谷崎潤一郎と『春琴抄』の映画化」『日本近代文学』61、59-72頁、1999・10、「消された眉 泉鏡花と溝口健二の「映画的」文体」『大妻国文』44、107-126頁、2013・3）。今回は戦後の日本映画史においても重要な位置を占める監督増村保造との対比において、再考した。そもそも増村自身が、谷崎を溝口健二との関係においていち早く論じた批評家でもある。関東大震災を期に関西へと移住した谷崎と溝口に通底する創作意識・方法の大きな転回を指摘した増村の論点は、その後も複数の研究者に引き継がれているが、なぜ増村がそれを指摘する必要があったのか、その意義はあまり顧みられないことがない。そこで、異文化圏への越境を契機に創作の質を転回させた増村自身の経験と対比させながら、戦前から戦後にいたる言語および映像表象の史的变化をあらためて論じた。日本における言語および映像表象システムの相関を主題とする本研究全体の推進にとって、有意義であったと考える。